琉球弧世界遺産フォーラム

News Letter

2015・新春
vol.4

1月31日（土）講演会開催します

琉球弧世界遺産学会は2014年５月に誕生したばかりです。赤ちゃんに例えるならば、まだはいはい状態で伝い歩きも出来ない段階。それにしてはこうしたニュースレターをちゃんと！？出しているのが奇跡にも思えます。

今号も各地の皆様から原稿を頂きました。国内編の到着順でいうと、今帰仁グスクを守る会の山内氏、奄美のトラさんこと花井氏は奄美・琉球世界遺産検定にも協力して頂いています。盛本氏は埋蔵文化財の専門家。スペイン・シリーズはちょっと趣向を変えてイギリス・スコットランド「国境」のハドリアヌス帝の長城が登場します。著者の五藤克己氏は元文化放送報道部長。世界遺産は200か所以上回ったそうです。この冊子で年に５件紹介して頂くとしても40年はかかる計算です。その頃は読者の誰も生きておらず、世界遺産はいつのまにか4000件を越し、おかげで環境破壊にだいぶブレーキがかかり、緑と水の地球が再生・・ということになれば良いのですが。

2014年には世界遺産が1007件となりました。この後も日本の文化遺産登録が続きそうです。明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域、長崎の教会群とキリスト教関連遺産など。気になるのが奄美・琉球の自然遺産登録に向けた取り組みです。４か所の候補地のうち奄美本島、徳之島、西表島に比べ沖縄本島のやんばるが？？です。登録の要件として確かな保全を担保するための措置が求められるところ、国立公園の指定を先行させる作業が捗々しくないようです。さて、いかなる運びとなりますか。

なにか編集後記みたいな文章になりました。１月31日（土）には初めての講演会を開催します。出演はD.チャンドララール沖縄大学副学長がご挨拶と出演作品の上映。続いて當眞会長による琉球のグスク、花井副会長の世界遺産をめぐる最近の話題。その後調理室で沖縄スリランカ友好協会のご協力でスリランカ料理を楽しみましょう。



「中城城址」久高 正樹　画

琉球弧世界遺産学会第１回講演会　講演要旨

琉球のグスクについて

當眞 嗣一（琉球弧世界遺産学会会長）

沖縄県の５つのグスクと、御嶽・王墓・名勝など４つの文化財が 2000 年世界遺産になりました。琉球王国のグスク及び関連遺産群という名称で呼ばれています。登録されたグスクは５つですが、実は、かつて琉球といわれた地域にまだまだたくさんのグスクがあります。

グスクの多くは琉球石灰岩の石積によって築かれていますが、琉球石灰岩が発達してない地域では土を切り刻んで造られています。

グスクを発掘すると中国で生産され、商品として琉球各地に輸入された陶磁器類、生活用品のほかに食糧残滓である魚や貝、ウシやウマ等の骨、あるいは炭化した米や麦、また著名なグスクからは鉄の鏃や鎧の金具類も発見されます。

ではこれらのグスクは現在どういう形で残されているでしょうか。拝所や御嶽として地域住民の信仰する聖域になっているのもありますが、ほとんどのグスクは地域の人々からもその存在が知られないまま山の中にひっそりと残っています。

グスクの調査でわかったことは、地形を巧みに利用し，峻険な所はそれを生かし，峻険でない所は高い石垣や二重に石垣を築くなど、優れた築城技術によってつくられていることです。

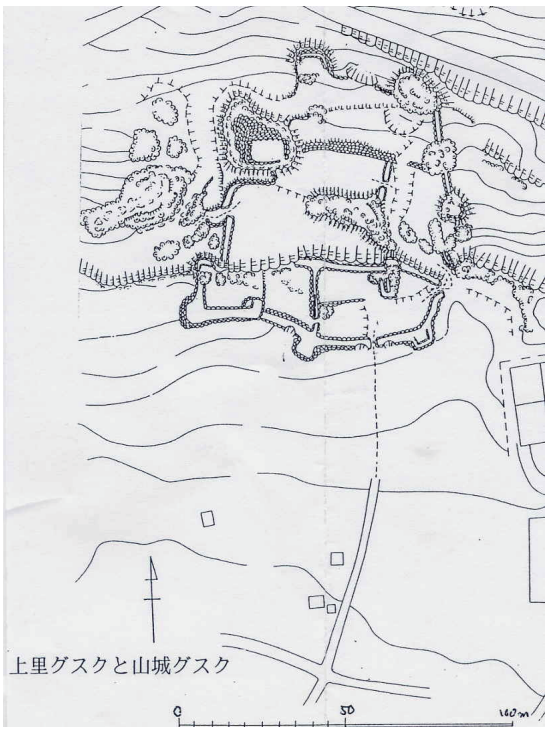
首里城などの世界遺産になったグスクでは、天然の要害となる石灰岩台地や丘の上に主郭を配し、その周囲を多くの腰曲輪群で取り巻くなど全体の縄張りの意識を明確に持って築かれていますが、他の多くのグスクでも外部の人、つまり侵入者に強く警戒して造られていることがよくわかります。

琉球での石積技術の導入は、14 世紀前半から中葉にかけてで，本土の近世城郭が石垣を採用する時期より 100 ～ 150 年古いことがわかっています。グスクの城壁石垣は曲線を描き､角の部分も曲面で処理しており，縦断面はほぼ直線的であって，本土の城の直線状に延び．角が稜になり、弓状の勾配になるものと異なっています。また一部では石垣上に胸壁を設け、アーチまたはアーチ状になる門がある点や城壁石垣の一部を突出させるあたりも本土の城にはみないところです。

グスクからは多数の貿易陶磁器が発見されることは前述した通りですが、こうした貿易陶磁器にみられるように．当時の琉球は大貿易時代であり、グスク築城・維持過程には大陸、朝鮮半島からの技術の導入があったことは確かです。

でも、こうした優れたグスクもただ歩くだけでその性格や機能、構造の良し悪しを知ることは難しいことです。グスクを深く知りその面白さを伝えていくにはグスクの縄張り調査を進め、その成果としての縄張図を描き、資（史）料化することです。グスクの縄張りとは、グスクの設計、つまりグスクの平面プランのことです。グスク造りの現場で図面に描いた設計図どおりにグスク地に縄を張り巡らしたことに由来します。

グスクには琉球の歴史が詰まっており、この情報を縄張図から引き出すことができます。今回は、私が作成した縄張図をもとに琉球のグスクの面白さについて話をすすめます。



縄張図の例・上里グスクと山城グスク（糸満市）

琉球弧世界遺産学会第１回講演会　講演要旨

世界遺産講座その１　世界遺産に学ぶ地域遺産の保全と活用

花井 正光（琉球弧世界遺産学会副会長）

世界遺産条約ができて既に 40 余年。この間世界遺産リストに登録された世界遺産は今年 1000 件を突破し、その数 1007 件にまで増えました。年平均で 20 数件のペースで増えてきたことになります。登録件数の増加で、登録世界遺産をもつ国が確かに増えはしましたが、国による登録件数の大きな開きは相変わらず解消されていません。ここ 20 年ほど格差是正のための工夫がなされ、新たな類型の世界遺産が登録されるようになりましたが、世界の地域や国を通じて世界遺産が万遍なく広がるにはなお時間がかかりそうです。

ところで、近年、史跡をはじめとする指定文化財の保存や整備・活用の考え方に新たな手法が加わりつつあることにお気づきでしょうか。地方自治体が取り組む事業においてもこれまでと様相の異なる事例が目立つようになってきました。この動向は、国内では 21 世紀を迎えた頃から加速したもので、ざっというと、地域に所在する多様な文化財を個々に捉えるのではなく、カテゴリーの異なる文化財を、文化や自然環境も含め包括的、統合的に広く捉えて「地域遺産」として理解し、社会・経済・自然環境にかかわる地域の社会生活と一体化させ、現代社会の課題に立ち向かい、現在および将来の世代にとって良好な地域社会の創出のツールのひとつにする取り組みとみてよいでしょう。

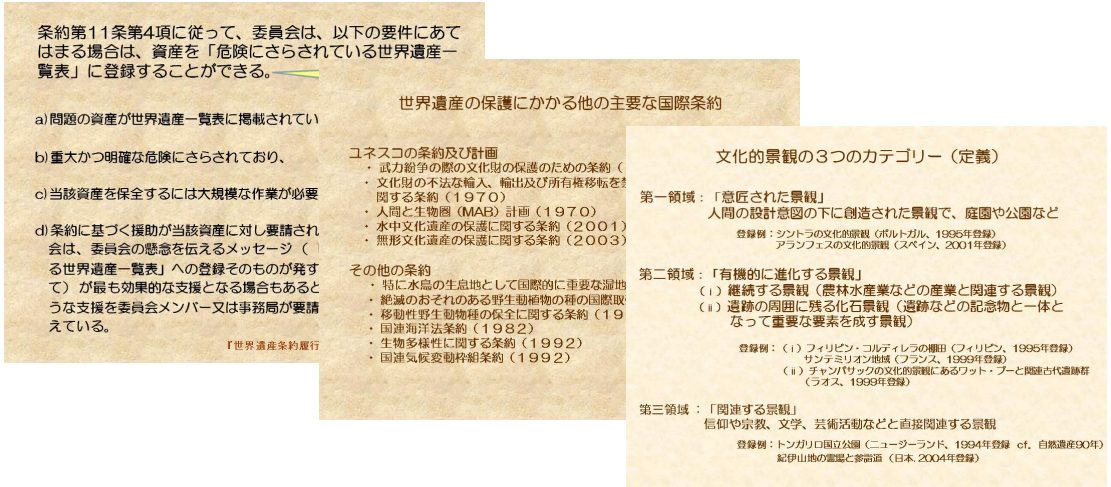
この取り組みの考え方は、地域遺産を社会生活において現代的役割を持たせることで持続可能な発展に資そうとする世界遺産条約の精神と、実は軌を一にするものなのです。1960 年代に加速した技術革新の普及が地球規模で貴重な遺産を破壊し、喪失し、人類の存続までもが脅かされるまでの危機的状況を背景に、この事態の回避策のひとつとなることを目指し国際的合意によりできたのが世界遺産条約でした。条約の前文にそうした背景や目標が簡潔に表現されています。

さて、「顕著な普遍的価値」を有する人類共通の宝を守り、将来世代に継承することに目標をおく世界遺産の仕組みは、遺産を地域社会の運営や課題解決に活かし、文化財の保全と活用を計画し実行する施策決定者にとって示唆に富むと考えられます。適切な保全・保護を担保するためのルールを始め、本条約の普及啓発に欠かせない地域への配慮や新たなカテゴリーの創出など、地域遺産の保全にとっても学ぶべき点が少なくないのです。

また、国内でも新たな文化財として普及しつつある文化的景観も世界遺産にその祖を求めることができます。人の営みとその所産としての有形、無形の遺産を地域遺産として土地の自然と一体的に捉え、地域固有の文化や歴史を理解しようとする文化的景観は、地域の持続可能な発展をめざす取り組みのツールとしての役割を担えるのではないかと期待されています。

これからの地域遺産の保全と活用の視点として、世界遺産の変遷や保存管理の手法に学ぶべきところが多いことについて考えてみたいと思います。

(NPO 法人沖縄エコツーリズム推進協議会会長)



歴史の道：中城ハンタ道と世界遺産

盛本　勲（沖縄県立埋蔵文化財センター）

１．はじめに

2014 年 11 月 24 日（金）、中城村に所在する歴史の道：中城ハンタ道〈なかぐすくはんたみち〉が国の文化審議会から文部科学大臣へ、史跡指定への答申がなされた。

中城ハンタ道は、首里城〈ぐすく〉を起点とし、西原町の幸地グスク、中城村の新垣グスク、中城グスクを経て、勝連グスクへ至る古道である。

周知のように、これらの中には 2000 年 12 月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、世界文化遺産に登録された構成資産をなしている首里城跡・中城城跡・勝連城跡の三件の城跡も含まれている。

中城：ハンタ道の詳細な築造時期は明らかでないが、主要部は概ね 14 世紀後半ごろまでに整備されたと考えられ､15 世紀後半以降は「中頭方東海道」の間切〈まぎり〉間を結ぶ宿次の道〈しゅくつぎのみち〉(別称：宿道〈しゅくみち〉）として機能していたものと推されている。そして、17 世紀以降は宿道としての機能は終息するものの、地域の集落間や間切間をつなぐ生活道として使用されてきたことが伝えられる。

このように、中城：ハンタ道は、14 世紀後半頃には整備され、首里から中城城を経て勝連城までを結ぶ主要道として、また 15 世紀後半以降は「中頭方東海道」として機能した幹線道路である。換言すれば、グスク時代には「首里城と勝連城を結ぶ「グスクの道」であり、歴史的に見れば尚泰久王・護佐丸・阿麻和利の三人を結ぶ「戦の道」」（沖縄県教育庁文化課編 1988）であった。

また、1853 年には米国ペリー艦隊が、西原間切の小橋川集落後背の高台で野営をした後、進路を北にとり、中城城跡に向けて通った歴史上重要な道である。

ハンタ道の「ハンタ」は､崖沿いという意味である。このことから､中城ハンタ道は太平洋を遠望しつつ、丘陵の崖沿いを行く道ということになる。道からの眺望はすばらしく、道程のほとんどで東側に中城平野や中城湾を望むことができる。道幅は、広い所で９尺（約 2.7m）、狭い所で４尺（1.2m）ほどあり、両脇には松並木が続いていたようである。

２．沿道の文化遺産など

中城：ハンタ道は、中城村の西側を南北に縦断する丘陵の縁辺にほぼ沿って通っているが、史跡指定への答申内容によると､このうちの保存良好な範囲で､その範囲は新垣〈あらかき〉地区で約 330m､伊舎堂〈いしゃどう〉地区で約 250m とペリーの旗立て岩の三地点となっている（図１）。



図１　中城ハンタ道位置及び史跡指定範囲図（中城村教育委員会提供）

また、沿道には 14 ～ 15 世紀に位置づけられる新垣グスクや（写真１～４）、同時期頃に比定される集落遺跡、新垣旧集落の屋敷跡（写真７）やワーランカー（溜め井的性格の井戸？）等も所在する。さらに、1853 年 5 月 30 日にペリー艦隊の探検隊 12 人が「島の奥地と東海岸」を探検する目的で沖縄島へ上陸し、西原町を経由して中城村新垣集落北側に二つの奇岩を見つけて休憩した。

その際、隊員の一人が岩の頂上に旗（星条旗）を立て（写真６）、兵隊たちは祝砲を鳴らせ、島人たちを驚かせている。地元で「たーち岩」と呼ばれ、艦隊一行が「バーナロック」(Banner Rock) と名付け、「ペリーの旗立岩」と称されている琉球石灰岩の二つの立位した岩である（写真５）。当該岩に登ると、東方に太平洋、西方に東中国海が望める、まさに絶景の景勝地である。

艦隊の随行画家であったハイネは、この岩を見事なかたちでスケッチし（写真６）、今日に伝えている。



写真１　新垣グスクの殿曲輪内近景（南東より）（筆者撮影）

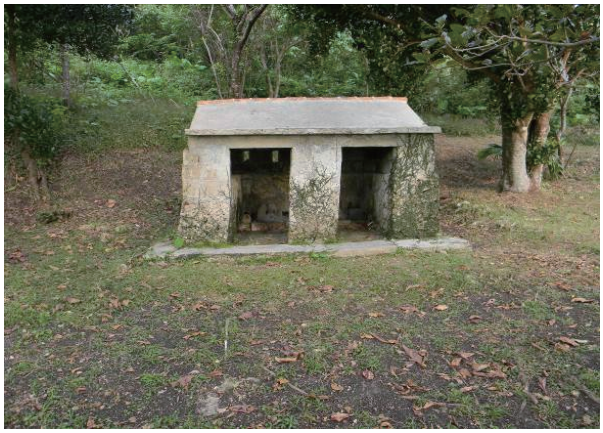


写真２　新垣グスクの殿曲輪内にある新垣の殿（ウチバラノ殿）（南より）（筆者撮影）



写真３　新垣グスクの石積み検出状況（中城村教委提供）



写真４　新垣グスクの石積み検出状況（中城村教委提供）

一方、約 250mが対象となっている伊舎堂地区でも道が良好に保存されているほか（写真８・９）、神事を司ったノロの添（そえ）石（し）ヌンドゥンチの墓（写真 10）なども指定対象物件となっている。これらの他にも指定対象物件にはなっていないが、沿道には、すなわち南方の首里側から南上原地区在の糸蒲の嶽、北上原地区在の安里壱里山、キシマコノ嶽及び 161.8 高地陣地跡、伊舎堂地区在の喜石原古墓群、ギイスのテラ、台（でー）グスク等、多くの文化遺産が所在している。

このように、中城ハンタ道の道と沿道の文化遺産は、活きた教材としての魅力が充満しており、生涯学習や児童・生徒の地域学習や歴史学習の貴重な教材となる。

このため、中城村教育員会と中城城跡のボランティアガイド団体である「グスクの会」でも平成 21 年から「護佐丸ウォーキング」と銘打って、村民または県民を対象とした歴史の道ウォーキングを実施し、歴史学習をも兼ねながら、古人（いにしえびと）が歩いた道等を体現し、沿道の文化遺産等の歴史を学ぶ格好の機会としている。

ウォーキングのコースは 10km、４ km の距離の異なる二つのコースが設定され、参加人数も多く毎年盛況を呈しているようである。



写真５　ハイネによって描かれたペリーの旗立岩の現況（筆者撮影）



写真６　ハイネによって描かれたペリーの旗立岩の絵



写真７　新垣集落の旧集落の根所（南西より）（筆者撮影）



写真８　伊舎堂地区の中城ハンタ道・１：石敷き道が続く（中城村教委提供）



写真９　伊舎堂地区の中城ハンタ道・２：石敷き道が続く（中城村教委提供）



写真 10　添石のヌンドゥンチの墓（中城村教委提供）

３．世界遺産の点から面への利活用

周知のように、2000 年に世界文化遺産に登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、グスク５ヶ所と関連遺産４ヶ所の９資産から構成されているが、これらの資産群は沖縄島北部の今帰仁村から南部の南城市に至る３市４村に点在している。この中でも首里城跡、園比屋武御嶽石門、玉陵の３資産は比較的隣接して所在するものの、他資産はかけ離れ過ぎている。そのために、これらを核としたツアー商品等の新開発はなかなか容易でない、という話を旅行エージェントなどから何度か耳にしたことがある。

近年、各々の資産を核とし、近隣に所在する文化遺産と連関させ、広がりを持たせて活用する取り組みが行われ始めている。すなわち、遺跡コンソーシアムである（高島 2007）。

一方、この提唱に対し、その実施にあたっては、市町村界を超えた連携など、なお多くの課題が山積され、これらの解決なしでは真の遺跡コンソーシアムの実施は不可能であるとの指摘もある（増渕 2008）。

３．世界遺産の点から面への利活用

周知のように、2000 年に世界文化遺産に登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、グスク５ヶ所と関連遺産４ヶ所の９資産から構成されているが、これらの資産群は沖縄島北部の今帰仁村から南部の南城市に至る３市４村に点在している。この中でも首里城跡、園比屋武御嶽石門、玉陵の３資産は比較的隣接して所在するものの、他資産はかけ離れ過ぎている。そのために、これらを核としたツアー商品等の新開発はなかなか容易でない、という話を旅行エージェントなどから何度か耳にしたことがある。

近年、各々の資産を核とし、近隣に所在する文化遺産と連関させ、広がりを持たせて活用する取り組みが行われ始めている。すなわち、遺跡コンソーシアムである（高島 2007)。

一方、この提唱に対し、その実施にあたっては、市町村界を超えた連携など、なお多くの課題が山積され、これらの解決なしでは真の遺跡コンソーシアムの実施は不可能であるとの指摘もある（増渕 2008)。

このように、クリヤーすべき課題は少なくないものの、自治体内での取り組みはすでに着手されており、筆者も沖縄県内の事例を紹介したことがある（盛本 2008)。そして、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」では、今帰仁グスクを学ぶ会によって、先駆的な取り組みが行われており、今帰仁城跡への来園者に対し、オプショナルガイドとして、城跡周辺の文化遺産めぐりを３コース設定し、案内を行っている。このことは、世界遺産の一資産としての今帰仁城跡の歴史・文化的価値の理解のみでなく、今帰仁城跡と関連する文化遺産を理解させることによって、より今帰仁城跡の価値の高さや広がりに繋げようとするものである。このような取り組みは文化庁が提唱している「歴史文化基本構想」、すなわち地域に所在する文化財を指定・未指定あるいは有形・無形にかかわらず幅広く捉えて、的確に把握し、総合的に保存・活用しようということに通じるところがあると考える。

このような流れに照らし合わせてみた場合、歴史の道：中城ハンタ道の史跡指定１）を機に、中城城跡の来園者に対し、「中城城跡と関連文化遺産「歴史の道：ハンタ道」」等とのキャッチフレーズのもと、オプショナルガイドメニューを企画した積極的な利活用が望まれる。このことは、中城城跡の歴史・文化的価値や理解の高揚に繋がるだけでなく、点としての中城城跡の活用から面としての利活用へ繋がっていき、広がりや深みが増してくるであろう。

４．おわりに

2000 年 12 月２日に登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」も 2014 年 12 月２日で 15 年を経過する。

日時の経過とともに、沖縄県民の間でもその価値の高さの意識が薄れつつあるとともに、利活用等についてもマンネリズムの感は否めない。歴史の道：中城ハンタ道の史跡指定によって、中城城跡の魅力がなお一層深化するとともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」全体の魅力が深まり、かつ利活用に繋がっていくことを望むのは筆者一人ではなかろう。

小稿をまとめるにあたって、中城村教育委員会の渡久地真氏と新城卓也氏には写真データの提供を受けるとともに、渡久地氏には草稿の校閲までしていただいた。銘記して謝意を表するしだいである。

＜註＞

１）　官報告示をもって正式指定となるものであるが、答申から官報告示までは事務的手続きのため、答申物件がひっくり変えることはまずもってあり得ない。

＜参考文献＞

沖縄県教育庁文化課編，1998：沖縄県歴史の道調査報告書Ⅴ－中頭方東海道－。沖縄県教育委員会。那覇。

高島忠平，2007：遺跡コンソーシアムの提案。2007 年度日本遺跡学会全国大会発表要旨集。日本遺跡学会。奈良。

新城卓也・渡久知真・編，2014：古道　ハンタ道－歴史の道環境整備事業報告書－。中城村の文化財第 16 集。中城村教育委員会。沖縄県中頭郡中城村。

増渕　徹，2008：特集１　遺跡コンソーシアム～地域連携～　報告　遺跡連携（コンソーシアム）の課題と方向性－可能性を探る前提として－。遺跡学研究。第５号。pp48 ～ 53。日本遺跡学会。奈良。

盛本　勲，2008：特集１　遺跡コンソーシアム～地域連携～　グスク等の保存整備と活用 The Repair maintenance use of a Gusuku site」。遺跡学研究。第５号。pp34 ～ 41。日本遺跡学会。奈良。

地域に支えられる世界遺産を目指して

山内 道美（今帰仁グスクを学ぶ会）

2000 年に世界文化遺産として「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が登録されました。その９つある資産のひとつ「今帰仁城跡」の地元である今帰仁村は 2005 年に初めて城跡の案内人を養成するために「ガイド養成講座」を開催し、県内各地から多くの方々が受講されました。その修了生有志が中心になって結成されたのが「今帰仁グスクを学ぶ会」。私はそこで案内ガイドをしている山内と申します。

当会が村の委託を受けて「城跡案内事業」をスタートして来年で 10 年、現在 25 名の認定ガイドが国内外から来られた観光客や修学旅行生のみなさまと一緒に歩きながら「今帰仁城跡の世界遺産たる所以」をわかりやすく案内しています。ガイドがお話しする内容は史跡や琉球史の解説にとどまらず、遺跡の発掘や保全の苦労話から「どうしてグスク（琉球の城）を訪れると癒されるのか」といったことまで多岐にわたり、それらを 60 分間の案内ですべて語ることは容易なことではありませんが、とくに私がこれだけは外せないと心掛けていることは「沖縄の人たちのメンタリティ（ちむぐくる）がどこからきているか」ということと、「そのことこそが沖縄の魅力になっている」ということです。

７月、私は名護市にある名桜大学の公開講座で、当会の活動についてお話しする機会を得ましたが、そこであらためて「地元住民にとって世界遺産とはいったいどんな意味があるのだろう」ということについて考えさせられました。私たちガイドはよそから来られたビジターに対してはあれほど熱心に「今帰仁城跡の魅力」を伝えようとしているのに、これまで地元の人たちに対してこれといった働きかけをしてこなかったのではないか。地元の人たちと世界遺産との接点を作るべく、これからはもっと学校や地域の子供会、婦人会、老人クラブと連携をとっていきたいと思います。10 年目にしてそのことに気づきました。観光に携わる私たちのような一部の人たちだけが世界遺産にかかわるのではなく、より広範な地元の人たちの盛り上げがあって世界遺産は維持される方がいいに決まっています。

当日は世界遺産検定マイスターの小六克助氏の訪問者の視点からのプレゼンテーションがあり、また会場には東京から来られた世界遺産クラブの方々が多数参加されていて、私は正直大変なプレッシャーを感じていましたがそれ以上の大きな刺激をいただきました。夜遅くまで交流会に参加していただいた新垣裕治先生をはじめ東京の皆様にこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。

またこのような貴重な機会をつくっていただいた花井正光先生、緒方修先生、どうもありがとうございました。

「奄美・琉球」の宝

「奄美・琉球」の宝を一言でいうと「その多様性」にあります。

何が多様なのかというとありとあらゆるもの。自然と文化の多様性がその土地の魅力となっています。

前近代といわれた時代には地球上のどの地域にもそれぞれの自然や文化の多様性が見られたのですが、マスメディアや交通の発達により「地方の衰退」あるいは「地方の都市化」が進んだ結果、今やどこへ行ってもだれもが同じような格好をし、同じようなものを食べ、同じような番組を見、同じような言葉をしゃべるようになってしまいました。

この文章を読んでおられる多くのみなさんはきっと「旅行大好き人間」だと思いますが、地球がずいぶん狭くなったなぁと感じておられませんか。私は新しい土地を旅する醍醐味は、見たこともない景色を見、食べたことのないものを口にし、自分とは異質のくらしをする人たちと出会うこと。つまり「未知の世界」に出くわすことだと思うのですが、最近旅をしていて、以前に比べて驚くことや感動することが少なくなったと感じるのは私だけでしょうか。国境を越えるたびに通貨を両替し、エキゾチックな衣装を身に着けた人たちの聞いたことのない言葉が聞こえてきたときのあのゾクゾク感・ワクワク感がもはや遠い過去のことになってしまった気がします。グローバル化が進むというのはそういう喜びがどんどん無くなってしまうことなのかもしれません。かつては何もいじらないありのままの姿がその土地の魅力だったのに今や無理矢理人の手によって観光資源を作らねばならない。そんな時代になってしまったことを私はとても残念に思います。

かつて北部琉球文化圏に属していた「奄美・琉球」にはユネスコが「危機言語」に認定した６つの琉球諸語のうち「奄美語」と「国頭語」があり「沖縄語」と区別されています。
私の暮らす今帰仁村は「国頭語圏」に属していますが、村内にある 19 の字のそれぞれが微妙に異なる「しまくとぅば（島言葉）」を持っています。このことは私たちの今帰仁村だけでなく他の地域にも言えることです。とくに「やんばる」といわれる県北部地域の集落では「しまくとぅば」だけでなく、地元の人たちによって部落ごとに独自の祭祀や芸能がいまも継承されています。

特筆すべきは、そういう多様な文化が残されている地域の多くが、じつは「生物固有種」の生息・育成地域と重なり合っているという事実です。現在最終段階を迎えている「奄美・琉球」の世界自然遺産登録は、レッドリストに掲載されている国際的希少種の生息・育成地での生物多様性保全を図る上でとても重要な意味を持っています。

冒頭で「奄美・琉球」の宝と言いましたが、その宝とはじつは日本の、また世界の人にとっての宝でもあります。「奄美・琉球」の自然、そしてそこで長い時間をかけて育まれてきた文化の多様性もまた保全されるべき大切なものだと考えます。いったん消滅してしまえば再生することはないのですから。

ローマ帝国の境界線

緒方 修（奄美琉球世界遺産学会事務局）

今回はいきなり 1800 年前のスコットランドに飛びます。西暦 122 年、ローマ帝国の城壁がグレートブリテン島を分断しました。長さ 118 キロもの長い壁です。世界の歴史⑤「ギリシャとローマ」（中央公論社）から引用します。「北部を除くブリテン島の大半が、ローマの支配下に収められる。しかし、スコットランド地方の制圧は、原住部族民の激しい抵抗と反乱のためにあきらめざるをえなかった。」（p. 438）そこでハドリアヌス帝が考えたのが、「途方もない計画」つまり「西のソルウェー湾から東のタイン河口にいたる全長 120 キロメートルの長大な防壁を建設」することだったのです。この長城は 17 世紀までスコットランドに対する防御壁として利用され、現在も「両国！？」の境界として続いています。

スコットランドがイングランドと初めて戦ったのは 1871 年のことです。いやこれはラグビー代表のテストマッチの話。１対０でスコットランドの勝ち。現在はトライが５点、ペナルティゴールやドロップゴールが３点ですから、ずいぶんルールも変わりました。

最近の６ネーションズ・ラグビーが「国」を考える上で参考になります。６つのネーションとはスコットランド、ウェールズ、イングランド、アイルランド、フランス、イタリア。なんだ最初の４つはイギリスじゃないか、と思う人もいるでしょう。イギリスの正式名称は英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）。最初に北アイルランドからご説明しましょう。アイルランド島の北６分の１くらいが北アイルランドです。南はアイルランド共和国。昔はちゃんと国境線がありました。第二次世界大戦中は同じ島の中で、北はイギリスですから戦争の当事者、南は中立国という不思議な関係。当時の首相チャーチルが休暇で北アイルランドを訪れるのを狙いナチス・ドイツが誘拐しようと諮ります。作戦は南の中立国アイルランドにパラシュートで降り、国境を超えてチャーチルの別荘に近づきます。この後は冒険小説のベスト１「鷲は舞い降りた」（ジャック・ヒギンズ―ハヤカワ文庫）を是非お読み下さい。

私が訪れたのは 30 年も前、南北の国境といっても道路に高さ３０センチくらいのなだらかなコンクリートの盛り上がりがあるだけ。一時停止してゆっくり乗り越えました。それでも取材先のＩＲＡ（北アイルランド共和軍）の根拠地の街に近づくと、道路に軽自動車くらいの大きな岩が何個も置かれていました。イギリス軍の車が容易に近づけないように警戒しています。最近刑務所から出てきたばかりというＩＲＡ兵士にインタビューした時、事務所の鉄線入りガラスにいくつか銃痕を見かけました。先週襲われたとのこと。街では「Boycott BOAC」（英国航空をボイコットせよ）のステッカーをあちこちで見かけました。イギリス最初の植民地アイルランドでまったく問題が片付いていないことを実感しました。ラグビーに戻ると、アイルランド代表は仲良く南北アイルランドの選手で結成されます。スコットランドの成績は最近は６カ国（！？）中、４位どまりです。

奄美だより

花井 恒三（奄美のトラさん　内閣府地域活性化伝道師）

奄美は現在５つの世界遺産価値と同時に向き合っている。それは、①世界自然遺産（ユネスコ）、②世界無形文化遺産（ユネスコ歌掛け文化）、③世界記憶遺産（ユネスコ、民族無欠の日本復帰運動）、④世界言語遺産（ユネスコ、絶滅危惧希少言語）、⑤世界人権遺産（国連の世界人権委員会、先住民族琉球人）の５つ。いずれも、沖縄と切り離せない、琉球弧共通のテーマである。

この 5 テーマのうち、⑤世界人権遺産については、日本国政府が、琉球人を先住民族として位置付けていない、人種差別はないとの見解のようであるから、私は、あるものの、表に表わすことが止めている。

上記５テーマの中、今回は奄美の世界自然遺産についてレポートする。

奄美が「世界自然遺産」を意識してプロジェクト化したのは 10 数年前に定めた「奄美群島自然共生プラン」。

自然共生プランは、奄美の自然に係る宝探しとその保全、増殖、活用を企図した。この計画以降、「奄美群島●●生態系調査」を経て、世界自然遺産登録へ向けた各種アクションプラン、事業実施へと進み、現在に至っている。

並行して、「奄美ミュージアム構想」（島、産業共、皆、構成員との見立て）、「あまみ長寿・子宝プロジェクト」（10 万人人口当たり百歳以上人口及び合計特殊出生率●日本一 C 級」の 2 つのプロジェクトも同時スタートした。それまでは、屋久島の自然の高低差の魅力に対し、奄美は密度、ロット（集積）、生物多様性の魅力。人と自然との共生では、奄美は沖縄は越えられるが、バリ島は越えられないだろうなど、相対評価されてはいたのだが、いきなり世界自然遺産候補地として踊り出たのである。

以降、私は次のように奄美を評している。

①本来は横綱（世界自然遺産）でなく、人気大関貴ノ花（初代）がふさわしい奄美だが、横綱免許も頂けるのなら、人気大関と横綱を併せ持つ島になりたい。というのも、標高 694.4m の湯湾岳が最高峰で、先例地に比し、人間の生活の手が入りながら、今なお世界自然遺産価値の生態系を保持していることは凄い島だと思うからである。

②千年後の奄美を持続させる手段として、世界自然遺産登録は不可欠。

③これからは、世界自然遺産の島に求心力を与えた人づくり、まちづくり、モノづくりの哲学が必要

④奄美の一人当自然保有面積は、沖縄の 5~10 倍とのぜいたくな島。（奄美大島は沖縄本島の面積の半分を有しながら、人口は 5%。奄美群島全体は、沖縄全体の面積の半分を有しながら、人口は 9%）など、評している。

さて、世界自然遺産登録へ向けた国など行政の動きは、ご承知のように、当初目標の 1 年遅れで作業がなされている。地元報道によれば、現在、14 年度国立公園など保護地域の指定、16 年 1 月のユネスコ世界遺産センターへの推薦書提出、同年度、IUCN（国際自然保護連合）による現地調査、17 年夏、世界遺産委員会の審査委員会の審査（登録可否決定）を視野に入れてすすめられている。

これらの地元推進機関は、「奄美群島世界遺産登録推進検討会（座長　宮廻甫充鹿児島大学名誉教授）、「奄美・琉球世界自然遺産候補地科学委員会」（座長　土屋誠琉球大学教授）、「奄美希少生物保護増殖検討会」（座長　石井信夫東京女子大学教授）など。

これらの作業に併せ、奄美では次の活動が活発化している。

①奄美群島広域事務組合と琉球大学の包括連携協定②「奄美・琉球世界遺産検定」、「沖縄歴史検定」③奄美リュウキュウアユ保全研究会、奄美の自然を考える会、環境ネットワーク奄美、奄美野鳥の会、奄美海洋生物研究会、徳之島虹の会などによる環境保全活動④子ども博物学士（　　）、などの教育活動⑤野ヤギ特区、マングース、野犬、野良猫、盗掘、移入動植物対策⑥県立奄美図書館世界遺産特設コーナー設置⑦大型クルーズ船（国内・国外）の相次ぐ奄美寄港⑧LCC（格安航空会社）バニラ・エアー就航⑧NPO 法人ポートタウン奄美、奄美エコツーリズム推進協議会、奄美国際懇話会（外国クルーズ船観光ガイド）、環境文化型シマ（集落）遺産発掘。発掘・活用型奄美まるごと博物館⑨奄美自然博物館設置運動などの市民活動等。

その一方では、南西諸島防衛強化の一環として、陸上自衛隊の奄美大島配備計画が決まり、中距離地対空・艦誘導ミサイルなどが配備される見通しで、「世界自然遺産の島」のイメージと、「自衛隊基地（駐屯地）の島」のイメージとの共存について議論が起こっている。

このようななかで、奄美を含む当学会発足の意義は大きく、奄美から当学会への加入を促進し、奄美・沖縄交流に努めていきたい。



緒方修（おがた・おさむ） 1946年3月熊本生まれ。文化放送を経て、
沖縄大学教授（現・客員教授）。NPO法人アジアクラブ理事長。ICOMOS会員。

総合型地域スポーツクラブ
NPO法人 アジアクラブ
電話 098（987）7007
アジアクラブ 検索

秋の京都

河原町から八坂神社方面へ歩く。着物姿の若い女性が目立つ。花見小路に入ると白人の観光客が多い。中国語の甲高い会話が飛び込んでくる。日本最古の禅寺・建仁寺の門前からも次々と着物の女性が出てくる。中に入り、石畳を踏んで大通りへ向かう。色黒の女性の群れと一緒に信号待ち、目が合うとにっこり微笑みを返してくれた。インドネシアやマレーシアあたりから来たのだろうか、全員が着物姿。「そうだ、京都行こう」は聞いたことがある。「そうだ、着物着よう」が京都の女性観光客に人気のようだ。



京都祇園 建仁寺 ※世界遺産ではありません

2014年10月24日、「世界遺産サミット～世界遺産地域の連携と魅力発信～」が京都国際ホテルで開催された。世界遺産「古都・京都の文化財」登録20周年を記念して、日本の18地域の世界遺産所在地から22市町村長が参加した。初めての試みである。門川京都市長は、このホテルも12月には撤去する予定、理由は隣の二条城の景観を害するから、と説明した。同時に窓のカーテンが開いた。道路を隔てて二条城の石垣が広がる。世界遺産の周辺（緩衝地帯）では15メートル以上の建物は制限され、改築の時にはこの規則に従わなければならない。そんな規模ではホテルとしてはやってゆけないのでやむなく撤退することになったようだ。さらに、京都市内では景観条例が徹底され、この7年間で屋上のネオンや看板、2万3千件が消えた。「美観は増したが、一方で大きな建物が建てられず、製造業なども参入しない、税収が一割減った」と市長は嘆いていた。

記念講演の祇園祭山鉾連合会理事長は、戦後すぐの食うや食わずの時に、動く美術館と言われる山鉾が復活し40万人の市民が集まった、と懐かしそうに語った。スピーチには松浦晃一郎ユネスコ前事務局長、久保成人観光庁長官、山下和茂文化庁文化財部長が立った。松浦氏は「日本は1万2千年以上の歴史を持つ。世界文化遺産をもっと増やしてゆきたい」、久保氏は「今年は外国人観光客が1,200万人を超す、オリンピック時には2,000万人にしたい」、山下氏は「文化財の保全と活用で地方創生を図りたい、日本遺産の独自の評価を世界に発信したい」と語った。

最後に京都宣言を発表。「一　世界遺産は、先人から受け継いだ人類の宝物であり、その価値を再認識し、これを守ることの大切さを確認し、地域をあげて守り、後世につなぐ取組を進めます」。「一　世界遺産は文化の象徴として内外の観光客にとって魅力的な資源であり、地域間連携を深めながら、この魅力を活かす取組を進めます」ほか二つの条項だった。

会議終了後、暗くなった二条城へ。係員が懐中電灯で足元を照らしてくれる。「アートアクリアム城～京都・金魚の舞～」のオープニングだ。着物の柄の上をスクリーンで3～4倍に映し出された金魚が舞う、金魚の動きが着物の柄を刻々と描いている。伝統と新しいアートの組み合わせ。京都ならではの創造だ。そういえば世界遺産サミットの会長・門川大作京都市長はいつ会っても和服で過ごしている。



アートアクアリウム城 ～京都・金魚の舞～

世界遺産・ハドリアヌスの城壁

五藤 克己（元文化放送記者）

編集サイドからの要望もあり、今回はハドリアヌスの城壁について書きます。２世紀前半に古代ローマのハドリアヌス帝によって築かれた城壁で、全長は117㎞、イギリスにある最大のローマ遺跡です。1987年に世界遺産に登録されました。

今年スコットランドの独立問題が話題となりましたが、イギリスとスコットランドの境界は、この城壁が歴史的淵源となっています。マルグリット・ユルスナールは歴史小説『ハドリアヌス帝の回想』で、「この島のもっとも狭くくびれた部分に城壁を築いて島を二分し、ローマの支配のいきとどいた肥沃な南の地域を北方民族の襲撃から守るために役立てた」と書いています。



カーライルから１日３便しかない路線バスで１時間半、最も保存状態がいいと言われるハウスステッズに向かいました。最寄りのバス停で降りたのは私一人、放牧された羊たちの姿しか見えない草原の一本道を15分ほど歩いて城壁に着きました。万里の長城の規模を想像していたのですが、目にした遺跡は予想していたものより小ぶりな印象を受けました。ローマの衰亡とともに城壁は打ち捨てられ、その後は恰好の採石場として、長い歳月、石が持ち去られ続けたのです。ローマ学の盛んなイギリスだけあって、現在は見事な修復がなされており、往時をしのぶことができました。



建設当時の城壁は、万里の長城に勝るとも劣らない重層的な構造だったようです。塩野七生さんの『ローマ人の物語IX　賢帝の世紀』によれば、城壁の外側に幅９ｍ、深さ９ｍのＶ字形の塹壕が掘られ、石壁は高さ４～６ ｍ、厚さは３ ｍ あったそうです。城壁の内側にはローマ式の街道が通り、さらに高さ３ｍ、幅６ｍ の土塁が２本作られ、その間には、幅・深さともに６ｍ の塹壕が掘られていました。また１ ㎞半毎に見張り用の砦が築かれ、６㎞間隔に設けられた要塞には、五百人から千人のローマ兵が配備されていました。まさに鉄壁の防御設備でした。これらの砦や要塞はもちろん、兵舎や倉庫、浴場などの遺跡も、城壁に沿って残っていました。

ハドリアヌス帝はスペイン・セビージャの近郊、イタリカの出身です。そして帝国の防衛力を整備するため、広大な古代ローマ帝国をくまなく巡察し、北限の国境としてこの城壁を築きました。



ヨーロッパとは古代ローマ帝国の遺産だ、という言い方があります。チャーチルはブリタニア（イギリス）が古代ローマに征服されたことをむしろ名誉ととらえ、ドイツとの違いを強調したそうです。

私がこの城壁を訪れたのは 2011年５月、滞在中のスペインからです。そんなこともあり、ハドリアヌス帝はこの地で、スペインからの遙かな道のりに想いを馳せたのではないか、そんな夢想を勝手に楽しみました。

注：ハドリアヌスの城壁の世界遺産は、2005年にドイツのゲルマニア防壁（リメス・ゲルマニクス）が追加されて、ローマ帝国の国境線と件名が変更されました。